

ライティング徒然草

エグゼクティブ・アドバイザー 林 健一

第19回 意味を理解して用語を訳す

はじめに

承認申請資料や医学論文には正しい用語を記載する必要があり、用語の正確性に疑問が生じると、内容の評価にも影響を及ぼしかねない。私自身、ランダム化比較試験の質の評価方法を述べた論文の中で「allocation concealment 割付けの隠蔽」という表記を目にしたときには、論文を読むのをやめたことがある。隠蔽は、本来であれば明らかにすべきものを故意に隠すことを意味し、「議事録の改竄を隠蔽する」といったように用いる。したがって、このように訳すと、「本来であれば開示すべき割付けを隠すこと」という意味になってしまう。

しかし、ランダム化比較試験では、試験に参加する患者を選択するまで医師等に割付けを伏せることが重要になる。たとえば、「1番＝被験薬、2番＝プラセボ…」といった割付けを事前の開示すると、軽症の患者が2番目になるように同意取得の順番を細工することが可能になる。これでは選択バイアスを回避できない。このため、割付けを伏せることの重要性を伝える目的で allocation concealment という用語が生まれたのである（付記：二重盲検試験では開鍵まで割付けが伏せられるため、この概念はオープンラベルのランダム化比較試験を実施する際に重要となる）。

以上を踏まえると、日本語訳には「隠すべきものをしっかり隠す」という趣旨が伝わるものを選ぶべきで、たとえば「割付けの秘匿」などと訳すほうが適切である。なぜなら、秘匿は「情報源を秘匿する」といったように用いられるからである。このように、臨床研究に関する用語の中には適切でない日本語訳が用いられているものがあり、そうした事例を以下に紹介する（用語は原語のアルファベット順に記載した）。

Decision analysis 誤訳：決断分析

決断は意志をきっぱり決めることを意味し、「決断を迫られる」のように用いられる。このため、決断分析と訳すと、「判断に迷った際、えいやっ!!と思い切って決めるための分析」と誤解される恐れがある。しかし、decision analysis は、ある疾患の治療方法は何が最善かを考える際に、各治療方法のベネフィットとリスク、患者の好みなどを系統的に評価する手法を指す。すなわち、専門家等の主観的な判断に頼るのではなく、不確実さを考慮しながらも、データに基

づいて系統的に治療を決定しようという背景から生まれたのがこの手法で、「決定分析」などと訳すほうが適切である。

Deterministic method of allocation 誤訳:決定論的な割付け方法

決定論というのは「あらゆる出来事は自然法則や運命などによってあらかじめ決まっている」という考え方で、このように訳すと、「参加者に被験治療・対照治療のどちらが割り付けられるのかはあらかじめ決まっている」という意味になってしまう。

実際には、参加者の誕生日が奇数であれば被験薬、偶数であればプラセボを割り付ける、あるいは同意の取得順に被験薬とプラセボを交互に割り付けるといった方法を deterministic method of allocation と呼ぶ。このような方法を用いると、まず患者の誕生日を確認し、誕生日が偶数の場合には、軽症の患者だけに試験の内容を説明したり、プラセボを投与する順番がきたら軽症の患者から同意を取得したりして、プラセボ群に重症の患者が含まれないようにすることが可能になる。こうしたランダムではない割付け方法を指すのがこの用語であり、本来の意味を伝えるためには、「確率の要素が含まれない割付け方法」などと訳すほうがよい。なお、同じ意味で用いられるのが quasi randomization であり、こちらの日本語訳についても後述する。

Differential recall bias 誤訳:差別的想起(思い出)バイアス

差別は、あるものと別のものとの間に認められる違いを指す言葉で、「他社製品との差別化」といった容認できる区別に用いられることもあれば、「人種差別」「男女差別」といった容認できない区別に用いられることもある。ただし、「的」と組み合わせると、「差別的な発言」といったように、好ましくないニュアンスが含まれることが多い。このため、「差別的」の使用には慎重さが求められる。

Differential recall bias はケースコントロール研究に潜むバイアスの一つで、研究参加者の心理的な状態によって記憶の正確性が異なることが原因で生じる。たとえば、ある食物Xと病気Yとの関連を調査する目的で、病気を発症した人と発症していない人に過去の X の摂取状況を質問したとする。この場合、病気を発症した人はその原因をいろいろと考え続けるため、Xを摂取したことを忘れない可能性がある。一方、病気を発症していない人は健康面の悩みを持たないため、Xを摂取したことを忘れてしまうかもしれない。この結果、Yの発症者と非発症者とでXの摂取者と非摂取者の比が異なると、Xと Y は関連するようになってしまう。このように、記憶(想起, 思い出)の差がもたらすバイアスが differential recall bias であり、差別とは無関係であることから、「想起の差に基づくバイアス」などと訳すほうが適切である。

Expected number of deaths 誤訳:期待死亡数

期待は、将来そのことが実現すればいいと待ち望むことを意味する。このため、期待死亡数と訳すと、参加者の死亡を待ち望むことになってしまう。臨床研究に関与する者が参加者の死亡を「期待する」などもってのほかであり、この誤訳を許容してはならない。

実際には、先行研究のデータ等を用いて計算した死亡者数(イベント数)が expected number of deaths である。このように、expect は「実現を待ち望む」という意味だけでなく、「(根拠があって)多分起こるであろうと予期・予想・予測する」という意味でも用いる。したがって、「予想死亡数」などと訳すほうが適切である。

Quasi randomization 誤訳:準ランダム化

準は、それに次ぐもの、それに近いものを意味する言葉で、しばしば肯定的なニュアンスが含まれる。たとえば、「準優勝」は、優勝に次ぐ(見事な)成績として、決勝戦まで残った個人やチームを称える場合に用いることが多い。このため、準ランダム化と訳すと、「ランダム化に次ぐ(適切な)割付け方法」と受け取られかねない。

しかし、この用語は「ランダム化のように見えるが、実際にはそうでない割付け方法」を意味しており、deterministic method of allocation と同じく、ランダムではない割付け方法を指すものである。以上を踏まえると、「疑似ランダム化」などと訳すほうが適切で、思い切って「偽のランダム化」と訳してもよい。

Residual confounding 誤訳:残差交絡

残差は、標本のデータから得られた予測値と実測値との差を示す統計用語で、「残差プロット」「残差分析」といったように用いる。残差プロットは、回帰式から得られた予測値と実測値の差をプロットすることであり、残差分析は、残差に何らかの傾向がないかどうかを分析することである。したがって、残差交絡と訳すと、「残差が原因で生じる交絡」と誤解される恐れが生じる。

実際には、residual confounding は交絡が残っていることを意味する。たとえば、交絡因子と考えられるものを共変量として解析モデルに組み入れたにもかかわらず、交絡の影響を除去しきれなかった可能性がある場合に用いられる。すなわち、残差とは何ら関係がなく、「交絡の残存」などと訳すほうが適切である。

まとめ

今回は適切でない日本語訳をいくつか紹介した。こうした事例に共通するのは、用語の意味を考えることなく、英和辞典に記載された訳語を機械的にあてはめているということである。翻訳というのは「ある言語で表された文章を他の言語に置き換えて表すこと(大辞泉)」で、重要なのは伝えようとする情報を変えないことである。したがって、英語の用語を日本語に訳すのであれば、原語の意味を正しく理解するとともに、日本語に対する感性を磨くことが必要である。

臨床研究の手法は日々進歩しており、新しい用語も次々と生まれているが、残念なことに適切でない訳を目にすることもある(例:greedy matching 強欲マッチング, intercurrent event 中間事象)。紙数の関係から本稿はここで終えるが、こうした訳に出会ったら、ぜひ適切な訳をご自身で考えていただきたい。そうすることによって、皆さんのライティング能力は飛躍的に向上するはずである。

付記:

本稿の執筆に際しては、広辞苑(岩波書店), 大辞泉(小学館), Merriam-Webster Dictionary (Merriam-Webster Inc.)を参考にしました。